

幼児の紙芝居への反応 —反応パターンの抽出と生起する文脈の検討—

小 平 英 志

紙芝居は絵本と並ぶ教育教材として保育の現場で用いられてきた。水出 (2003) によると、2002 年に実施された群馬県内の幼稚園・保育所の調査において、絵本の利用頻度と紙芝居の利用頻度はほぼ同程度であった。幼稚園や保育所に通う子ども達にとって、紙芝居や絵本は、日々親しんだ馴染み深い教材である。

紙芝居が幼児に与える影響に関して実証的研究はいくつか行われている。例えば、岡村 (2000) は紙芝居に用いられる絵に注目し、使用する絵によってストーリーに登場する動物の記憶がどのように異なるかを検討している。その結果、絵が記憶に与える影響が確認され、特にかわいい、好きな動物の絵ほど記憶に残りやすいことが示されている。また、広瀬 (2002) は紙芝居の導入によって子どもの動き (横転など) を誘導できることを示している。紙芝居は絵本とともに、幼児の活動そのものを左右するような「中核的な意味」を持っているとしている。また、紙芝居の効果を直接扱った研究ではないものの、越中 (2005) では、攻撃に対する幼児の道徳性の判断を明らかにするため、紙芝居による攻撃場面の提示が行われている。紙芝居によって幼児達は仮想の場面を想定することができ、研究者側はその物語に対する善悪の判断や受容の程度を観察することに成功している。

しかしながらこれらの先行研究は、紙芝居終了後の記憶や行動の変容、また判断・認知を扱ったものであり、実際に紙芝居を見てどのように幼児が反応しているのかを扱ったものではない。本来ならば保育所や幼稚園という場で行われていることが考慮されるべきであり、そこでのリアルタイムで素朴な反応が、紙芝居とは幼児にとってどのような意味を持つものなのかを明らかにする手が必要になるはずである。

演じ手と観客の相互作用において、観客側の反

応は重要な意味を持つ。演じ手は観客の反応で演じ方を変え、また演じ方の変化は観客が受けとめる紙芝居の世界を変え、また観客の反応として表出されるからである。一方で、紙芝居が教育の場で用いられる教材の 1 つであるという観点からも同様の相互作用が指摘できる。すなわち子どもの動機づけは子どもの行動や反応として表れ、教諭はその行動・反応を手がかりに教え方を調整する。調整によって教諭行動が変化し、その変化はまた、子どもの動機づけに影響を与えるわけである (布施・小平・安藤, 2006)。この相互作用の中では、目に見える形で現れる子ども達の行動や反応は、教える側にとって非常に重要な情報であり、自らの行動を評価するために不可欠なものである。つまり教諭にとって、子ども達の様々な行動・反応がどのような意味を持つのかを知ることが、教え方のどこをどのように調整していくべきなのかを考える上で非常に重要となる。

絵本の読み聞かせに対する反応に関しては、既に木戸・山口 (1989) の研究で 3 歳児から 5 歳児の幼児を対象に、反応チェックリストを使用した観察研究が実施されている。そこでは、絵本への正反応として、「笑い」、「驚き」、「復唱」、「凝視」、「うなずき」が、負反応として「よそみ」、「あくび」、「手わるさ」が得られている。それぞれの反応には言語と動作の 2 種の表出が想定されている。また、1 歳児の情動表出や物語理解について検討を行った古屋・高野・伊藤・市川 (2000) では、個人差が大きいものの、すでに 1 歳前後で絵本に対する表情の変化が、1 歳半から物語の確認や命名を行う様子が観察されている。また、絵本の登場人物の表情を模倣する様子なども見られたことを報告している。

では、紙芝居に対してはどのような反応が見られるのだろうか。紙芝居が幼児の認知や評価、判断を探るための刺激材料として用いられること

があるものの（例えば、先述の越中，2005）、幼児達が日頃親しんでいる幼稚園での紙芝居に対してどのように反応しているのかについての実証的検討は見られない。また、ストーリーの展開にともなって、幼児達の反応はどのように変化するのであろうか。本研究では、先述のように紙芝居が多用されている幼稚園や保育所を念頭に置き、幼児の紙芝居への反応についてのパイロット・スタディとして、観察法による反応のカテゴリの作成を目的とする。また同時に、ストーリーの展開と各反応の生起との関連について予備的な検討を行う。

方法

対象と観察手続き 年中組の幼児27名を対象に観察を行った。紙芝居は午後にプレイルームでビニールシートを敷いて行われた。幼児達はそこに靴を脱いで上がり、座った状態から紙芝居が始まった。演じ手は年中組の担任教諭（6年目）であり、紙芝居の舞台を用いて行った。観察にはビデオカメラ2台を用い、子ども達の正面及び後方から撮影した。

紙芝居 紙芝居には、幼稚園において初めて読み聞かせを行う、「あわてものしょうぼうしゃ ウーカン」（山脇恭・作、西村郁雄・画、教育画劇・製作）を用いた。ストーリーの概要は以下の通りである。主人公のウーカンがあわてものの消防車である。たき火で焼き芋をしている所を消火したり、病院と聞き間違えて美容院に駆けつけて水をかけてしまったりと失敗が続く。ウーカン



Figure 1 紙芝居の様子

は、仲間達が噂をしているところを聞き、自分を必要としていないことを知って泣きながら町を走る。通りがかりで火事が起こり、ウーカンは戻って消火を行う。そして誰よりも早く火を消し、仲間からも認められる。

観察時期 観察は2007年9月上旬に行われた。所要時間は6分30秒であった。

分析方法 カテゴリの生成に関しては6分30秒の全ての時間を観察対象とした。一方、紙芝居のストーリーの展開と反応生起の分析では、時間を30秒で区切り、13観察単位に分割して各反応の生起の有無を確認した。

結果

①カテゴリの生成

まず、全ての幼児の反応を対象に記録を観察し、木戸・山口（1989）と同様に言語的反応と身体的反応に分けて生起する反応をリスト化した。次に、再度観察を行い、そのリストが幼児達の反応を網羅しているかどうかを検討した。不足していた反応を追加しながら、作業を繰り返し、最終的なカテゴリを生成した。その結果に生成されたカテゴリがTable 1である。

まず、言語的反応については、全体的に数が少なかったが、多様な反応が見られた。紙芝居中の台詞を教諭が口にした直後にくり返す（台詞をくり返す）、また、紙芝居に書いてある文字を音読する（文字を読む）など、紙芝居の中に含まれる言葉を口にするという反応が見られた。また、ストーリーに関する疑問を口にしたり（疑問を口にする）、紙芝居の絵に関して指摘をする（絵についてコメントをする）ケースも見られた。さらに多くは紙芝居が登場した時であったが、「おー」などの驚きや感動を声にする様子も観察された（驚いて声をあげる）。また、紙芝居のストーリーとは関係なく、他の幼児に対して「見えない」と言ったり、教諭に対して紙芝居の時間が短かったことを訴える幼児も見られた（不満を言う）。

身体的反応では、顔や目をまっすぐ紙芝居に向ける反応（じっと見る）、逆に目をそらし、よそ見をする反応（よそ見をする）、体を左右にずらしたり、立て膝になる、立ち上げるなど姿勢を変える反応（姿勢を変える）、手をたたく（拍手をする）、

Table 1 紙芝居に対する反応のカテゴリ

	カテゴリ	反応例
言語的 反応	台詞を繰り返す	しゅー
	文字を読む	あわてんぼうの・・・
	疑問を口にする	何で水をあげるの。あれ、あの水色のは？
	絵についてコメントをする	美容院だ。タバコ吸ってる。
	驚いて声をあげる	(紙芝居が出てきたときに) おー。うわっは。
	不満を言う	見えないー、早かったー
身体的 反応	じっと見る	顔を向けてじっと見る
	よそ見をする	目をそらす
	姿勢を変える	体をずらす、立て膝になる、立ち上がる
	拍手をする	拍手をする
	体をさわる	口に手をやる、鼻をいじる、顔を触る、足を触る
	他の子に関わる	話しかける、他の子と手で形を作って遊ぶ
	絵をまねる	Vサインをする
	笑う	笑う
	頷く	頷く

顔や頭、体を触る反応も確認された(体をさわる)。また、他の幼児と関わるもしくは話しかけるなどの反応も見られた(他の子に関わる)。また、1箇所では確認されなかったが、観察単位12にウーカンが仲間よりも早く消火を行った後でVサインをしている絵をまね、Vサインを出した幼児が3名見られた。このような、絵の中に登場するキャラクターと同じ様な動作をしてみるという反応も確認された(絵をまねる)。そして、これも少数であったが、絵を見て笑う、頷くといった反応も見られた。

②紙芝居の展開と言語的反応

まず言語的反応について、紙芝居のストーリーの展開と対応させて整理をした。Table 2は、各観察単位に紙芝居の展開を対応させ、言語的反応を示したものである。まず、紙芝居のふたを開ける前に「開けてみて下さい」という教諭への要求があった。さらに、ふたを開けた後で、「おー」「うわっは」など驚きの声が上がった。タイトルを見た数名の幼児は、タイトルを声に出して読んでいた。紙芝居が始まると「見えない」などの声があり、同時に感嘆の声もあがっていた。観察単位

3に入り、ウーカンが間違えてたき火を消してしまう場面で「あらら。だめだよということしちゃ」とつぶやく幼児がいた。また、ウーカンが病院と間違えて美容院へ消火活動に向かうシーンでは、「どこに(行くの?)」という声があがっていた。水をかけたシーンでは、「何で水、あげるの?」と声を出す幼児がいた。さらにウーカンが美容院の客達に一生懸命謝っている場面では「美容院だ」と言ったり、同僚がウーカンの悪口を言うシーンでは、同僚達がタバコを片手に井戸端会議を行っている様子を見て「タバコ吸ってる」と言うなど、紙芝居の絵の中に登場するキャラクターや風景について、確認するような発話も見られた。

さらに観察単位10のたき火が倉庫に引火し火事が起こる場面では、「えっ。ウーカンは?」と口にする幼児がいた。観察単位11でウーカンの消火の音(シュー)を教諭が演じるが、少し遅れてそれをまねて「しゅー」という幼児もいた。鎮火した後に、仲間の消防車が到着する頃に、一人の幼児が「むげてまーす(何を表しているかは不明)」と口にして他の子に向かってVサインを示していた。このVサインは紙芝居中で消火をした後の

幼児の紙芝居への反応

Table 2 紙芝居の展開と言語的反応

観察単位	紙芝居の展開	言語的反応
1	始まり タイトル	開けてみて下さい。 うおー。 おー。 うわあは。 ねえねえ、車があるんだけど。 あわてんぼうの… 消防車。 あわてものの消防車…
2	消防車ウーカン登場。	えっ、見えない。 おー。
3	ウーカン、間違えてたき火を消してしまう。	あらら。だめだよそういうことしちゃ。
4	ウーカン、病院と間違えて美容院に向かう。 ウーカン、美容院に水をかける。	どこに。 どこにー。 何で水、あげるの？
5	おばさん達はカンカンになる。	
6	ウーカン、一生懸命に謝る。	美容院だ。
7	同僚達がウーカンの悪口を言いあう。 ウーカン、消防署を飛び出す。	タバコ吸ってる。
8	ウーカン、町中を走る。	
9	ウーカン、たき火をしている脇を通る。	
10	たき火が燃え上がる。	えっ、ウーカンは？
11	ウーカン、戻って消火する。	しゅー（放水の音をまねして）。
12	鎮火した後で、仲間の消防車が到着。	むげてまーす（他の子に向かってグイサイン） 見えないー。
13	仲間達がウーカンを見直す。 終了	もう？早かった。 早かったー。 あれ？あの水色のは？

ウーカンのポーズによるものであるが、それをまねながら他の幼児とふざけ合おうとする様子も見られた。

最後は仲間の消防車達がウーカンを見直すシーンで終わるが、その直後に「もう？早かった」「早かった」などと、紙芝居が短かった事に関して教諭に対して不満を言う幼児が何人がいた。また、「あれ？あの水色のは？」などと最後の絵についての疑問を口にする幼児もいた。

以上、紙芝居の展開と対応させると、言語的反応には、①目で見た文字や耳で聞いた音をく

り返す、見た絵を言語化するといった物語の確認（文字を読む、台詞をくり返す、絵についてコメントする）、②感じた疑問や驚きの表出（疑問を口にする、驚いて声をあげる）、さらに、③紙芝居の内容とは直接関連しないような事柄を他の幼児や教諭へと投げかける（不満）といった側面に要約できるようであった。全体的に教諭に対して答えを要求するような問いかけ方が少なく、それぞれの発話はつぶやきや独り言に近いものであるのも特徴であった。

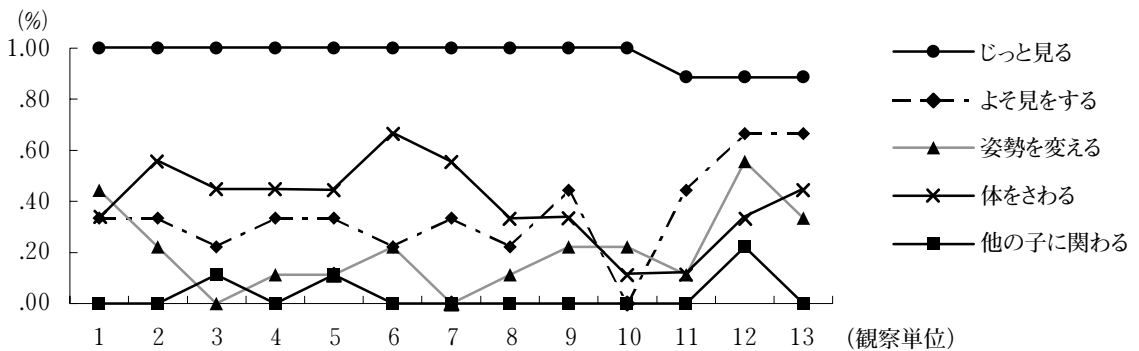


Figure 2 各観察単位における身体的反応 (9 ケース)

③紙芝居の展開と身体的反応

身体の動きが全観察時間を通して確認可能であった 9 名を対象として、紙芝居の展開と身体的反応の関連について検討を行った。コーディングにはタイム・サンプリング法を用い、観察単位である 30 秒間に 1 度以上確認された行動を生起したものと見なした。観察単位毎に身体的反応の生起率を算出したものが Figure 2 である。なお、反応のカテゴリ (Table 1) としてあげた「拍手をする」、「他の子に関わる」、「絵をまねる」、「笑う」、「頷く」については、少数 (生起回数がのべ 3 回以下) であったため、グラフから省いた。

「じっと見る」に関しては、全体的にも集中して紙芝居を聞いており、対象となった 9 名もほぼ最後まで紙芝居に集中していた。ただし、観察単位 11 のウーカンが戻って火を消す場面以降、「じっと見る」行動が確認されない幼児も見られた。一方で「よそ見をする」は観察単位 10 のたき火が燃え上がるシーンでは見られなかった。「体をさわる」反応もこの観察単位で最小になっており、ストーリーがクライマックスを迎え、子ども達が集中している様子がよくわかる。逆にウーカンが無事に消火してハッピーエンドに向かう観察単位 12 では、「姿勢を変える」「よそ見をする」「体をさわる」の生起率が上昇していた。「姿勢を変える」は、観測単位 1 や観測単位 13 で出現頻度が上がっており、序盤と終盤で体の動きが激しくなるようであった。

いずれも 9 名のコーディングをもとにしたものであり、結果の解釈は慎重に行うべきであるが、

幼児達の身体的反応は紙芝居の展開から十分に納得のいくものである。幼児達がどの段階でどの程度、紙芝居に引き込まれているのかを推測するのに、この身体的反応は十分解釈に値する反応であると考えられる。

考察

本研究では、紙芝居での幼児達の反応に注目し、その反応カテゴリを作成することを目的とした。また、紙芝居の展開とともにどのような言語的・身体的反応が生起するのかについても検討を加えた。

まず、反応カテゴリの作成からは、様々な言語的・身体的反応が得られた。言語的反応では、その反応数は少なかったものの、その内容をみると、台詞をくり返していたり、紙芝居に書かれた文字を音読したり、紙芝居を聞いて浮かんだ疑問を口にしたり、書かれた絵について指摘をしたり、驚いて声をあげたりと多彩な反応が確認された。物語を言語によって確認し、感じたことをさらに言語化し、表現しようとしている幼児達の様子が印象的であった。

阿部 (2007) は、紙芝居は演じるものであり、また演劇であるが故に、子ども達がスムーズに物語の主人公達へ感情移入できるとしている。絵本の場合は、読み手と一緒に物語に対することになるが、紙芝居の場合には演じ手は紙芝居の向こう側にほぼ隠れ、子ども達の目には、あたかも登場人物達が自分たちの意思で動いたり、話をしたりしているように感じられる。そこには物語を語っ

てもらおうという意識ではなく、物語に主体的に関わっているという紙芝居との1対1の感覚があるのかもしれない。紙芝居の双方向性は強調されることが多いが(例えば、鈴木、2005など)、むしろこの、演じ手が教諭であることをやめ、紙芝居の向こう側に隠れるところ、また、時には周囲にいる他の幼児の存在を忘れるほどにのめり込むところに紙芝居というメディアの独特さがあるのではないかと考えられる。本研究の言語的反応の多くが教諭や他の子ども達との相互作用の為のものではなく、子ども達の内言に近いものであったことを考えると、子ども達のそれぞれが主体的に感じ、考え、表出するという、ある意味で孤独な作業が紙芝居というメディアの1つの側面として指摘できるのかもしれない。

一方、身体的反応では、まず「じっと見る」が紙芝居全般に渡って高い様子が示された。これは分析対象とされた9名以外でも確認できる点であった。絵本の読み聞かせで「凝視」の状態をカウントした木戸・山口(1989)と同様の結果であり、絵本や紙芝居に向かう子ども達が、幼稚園でいかに集中して物語にのめり込んでいるのかを示す結果であった。また、ストーリーの展開にともなって、紙芝居への集中の程度が変化していく様子も確認された。特に体を触る反応は、よそ見や他の子との関わりと同様に、集中力や紙芝居へのコミットメントの低下を示している様子が見て取れた。紙芝居の進行と身体的反応の変化についてはさらに観察対象を増やし、他年齢との比較をするなどの詳細な検討が必要であると考えられるが、本研究のカテゴリによって幼児達の紙芝居に対する興味が比較的容易に類推できることが示されたと言えよう。

以上、本研究では、紙芝居に対する幼児の反応に関して、カテゴリを作成することができた。最後に、このカテゴリを用いた今後の研究課題について述べる。第1に、紙芝居や演じ手が変わることによってどのように反応が異なるかである。反応カテゴリを使用し、様々なストーリーでその生起頻度がどのように異なるのかについて検討することは、それぞれの反応の意味を明らかにする上で重要な課題であろう。また、本研究では比較的多様なバリエーションに富んだカテゴリが生成でき、幼児の

反応を一通り網羅できたのではないかと考えているが、別の題材であればその他の独特な反応なども確認されるかもしれない。第2に、他のメディアとの比較である。絵本の読み聞かせ時や映像(テレビ、映画など)を見た際の幼児の反応と比較することで、紙芝居の独自性と教育教材としての有用性が明らかになると考えられる。近年、特に教員養成における情報教育で取り上げられることの多いデジタル紙芝居についても、その特徴を幼児の反応から検討してみることも興味深い。第3に、より長いスパンで見た幼児達の変化である。紙芝居が幼児の様々な認知発達を助け、また感受性を育てるものならば、それとともに生じやすい反応が変化する可能性が考えられる。例えば、タイトルの絵を見て「車に目があるんだけど」と行った幼児(Table 2)は、消防車やその他の自動車に目が付いていることはおかしいと気付いているが故の反応である。また、ウーカンが間違えて水をかけてしまった場面で「あらら。だめだよそういうことしちゃ」と口にする幼児(Table 2)がいたが、このような発話の背後にはある程度の道徳性の発達が要求されることは確かであろう。これらの検討により、紙芝居というメディアの教材としての、また調査ツールとしての特性や有用性が明らかとなると考える。

引用文献

- 阿部明子 2007 幼児教育・保育の中の紙芝居
子どもの文化, 39 (7), 100-107.
- 古屋喜美代・高野久美子・伊藤良子・市川奈緒子
2000 絵本読み場面における1歳児の情動
の表出と理解 発達心理学研究, 11, 23-33.
- 布施光代・小平英志・安藤史高 2006 児童の積極
的授業参加行動の検討－動機づけとの関連
及び学年・性による差異－教育心理学研究,
54, 534-545.
- 広瀬仁美 2002 幼児の動きを引き出す環境設定
(1): 紙芝居等の内容が及ぼす影響に着目し
て 日本保育学会大会発表論文抄録, 55, 460-
461.
- 木戸由子・山口茂嘉 1989 絵本の読み聞かせに
於ける各年齢間の反応とその行動分析につい
て 日本保育学会大会発表論文抄録,

42, 150-151.

越中康治 2005 仮想場面における挑発、報復、
制裁としての攻撃に対する幼児の道徳的判断
教育心理学研究, 53, 479-490.

水出千尋 2003 紙芝居に関する研究：保育現場
における活用状況および意識調査 日本保育

学会大会発表論文抄録, 56, 826-827.

岡村徳重 2000 紙芝居が幼児に与える影響：絵
の効果を中心として 日本保育学会大会発表
論文抄録, 53, 362-363.

鈴木常勝 2005 メディアとしての紙芝居 久山
社

The Child's Reaction to Kamishibai

— Patterns of Reactions and Shift with Story Line —

Kodaira, Hideshi*

The purpose of this study was to obtain the patterns of reactions to Kamishibai in the kindergarten children. The shift in the reactions caused story lines of Kamishibai was also investigated. The observational study was conducted on kindergartners (N=27, age 4-5), and children's reactions were classified into linguistic and physical reactions. Linguistic reactions contained reciting dialogs, reading out loud, voicing the question, making a comment on pictures, gasping in surprise, and dishing out complaints to friends or teachers. Physical reactions consisted of staring, looking away, changing postures, clapping their hands, touching themselves, meddling in friends, imitating characters, smiling, and nodding. Linguistic reactions to the Kamishibai tended to emerge as internal speech during the entire show, and reactions of looking away and touching themselves decrease a with the climax of the story.

キーワード: 紙芝居 (Kamishibai), 幼児の反応 (reactions of children), 言語的反応 (linguistic reactions), 身体的反応 (physical reactions)